繪本通俗三國志

第一編

東京圖書館

和書門	小說類	二六函	六架	七八號	七五冊

TOKYO LIBRARY

繪本通俗三國志初編卷之三

明治十年交換

目録

董卓奥兵入洛陽
呂布刺殺丁建陽
廢漢帝董卓弄權

董卓起兵へ洛陽

何進退て家へ回りたれば袁紹問て曰く。いゞ定れる。何進ゞ曰く。十常侍を殺さゞ太后更へ許し玉はゞ。袁紹ゞ曰く。諸國より英雄の武士を召し上せ大へ兵を集めて威勢をゝして十常侍を誅せん何進ゞ曰く此計ゝゞ心へ合ゝり。扨太后の命を承へゞら推て十常侍を殺さんも惜われゞ他國の諸侯を呼で殺さむゞゝ主簿陳琳とゝみ出て曰く。此ゝゞ其用ゝり。世の流ゝも。自ら其目を掩ゝて去燕雀を捕ゝは是自ら欺ゝゝ取り微の物ゞゝも尚欺くゝゝを以てゝゝとゞんや。況んや國家の大ゝ權を以てゝゝとゞんや。ねゞ今皇威を捻て。天下英雄を

極まへば龍驤虎歩のまくらを汁をすゝ[illegible]。今又内変ちん
どを誅しまいんゆ。炭火を織んはてモを焚よりもやをゝ。只ゆを
決断して自ら征伐しまへ。天人ともにゆゝて。那附よ誅よ伐をゞ。
若わゆよ兵を招き。他国の武士を都の内よへまゞ。英雄各〻
を生ゞて。大乱の基とゆらん。是所謂倒まよ干戈を招て。人よ
授ゆに柄を以てもるの譬よ似なり。ゆゝらゞ破ゞ。何進
笑ゝ是儒夫の見なり。汝妄用の舌を動とゆ勿ゝと云ゆる時よ。人
手を打て大よ笑ひ此ゆ極でやを。長袖系会用なりといよ者あ
り。諸人是を見ゞ曹操ゝり。何進問て曰く。汝いゝる汁ゆ。曹操
答て内変の禍ひ古今ゝゆ此の如。只人主の寵幸して近侍せ
むるゆよ自ら権を執て浸淫の奸をゝ。今もし其衆を

正さんと思ひまゞ。悪人の張本を除き典獄の官よ命じて誅せ
しめ玉へ。何ものよ他国の武士を呼んで益く誅せんと宜ふゞ。
ゆゝ必ゞ敗るゞしと云よ。何進大よ怒り。汝二心あると云け
れ。曹操外よ出て哀を哭き。天下を乱る者いゝゝらゞ何進
ならんとゞゆる。何進はいよ諸人の諫を用ゞ。剰さへ詔を降
て武士を招く。其詔よ曰

朕聞敗紀乱常不日無誅害国傷時豈能弥久切
惟常侍張讓段珪等濫叨寵栄恣生孽逆不
思報本之恩復造滔天之禍意喜者一門誅
責心怒者九族誅夷。今諸侯於畿甸之外
天子於宮闈之中上下切齒咸思殄滅朕素聞

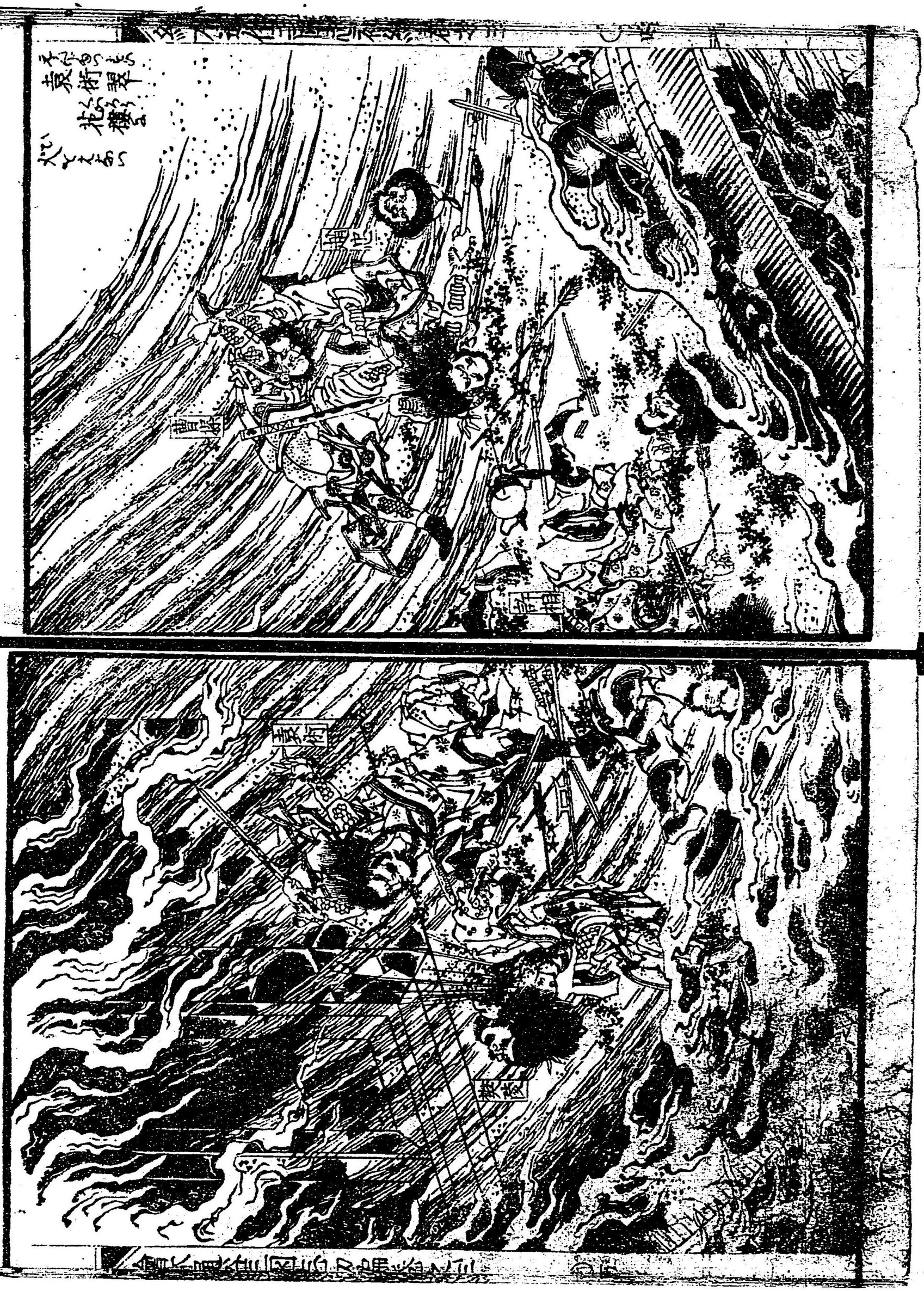
卿等心懐忠義討滅奸邪速提雄虎之師赴
定蕭墻之禍詔書到日火速奉行宜休朕懐
遐尔知悉

先詔書を発して四道の軍馬を召す。第一東郡の太守橋瑁第
二并州の刺史丁原第三河内太守王匡第四前将軍鞠卿侯領西
涼及の刺史董卓なり此董卓字は仲頴隴西臨洮の人にて身
長八尺腰の太さ十圍肌肉肥重凋面方目なる黄巾の賊を討時
さまざの功もありしが十常侍に賂いをよろこぶ。此の如く大変をゆさ
り。付て西園の軍勢二十万をわたせよりく謀反の企ありるを天
子詔りをくだして。都に上るべきを由を勅し給ひければ。天の助敬とよ
ろこび其婿中郎将牛輔を留て陝西を守らせ自ら李傕郭
汜張濟樊稠を使ひ都を指て上りける。其内に中郎李儒と云
者あり。計深くして是も董卓が婿さりしが。進出て申しるは今
天子詔をくだして。將軍を招き玉る共今の世は君臣礼を乱て。祝
のみも詐多し。先表を以て天子に奏し。其後に大軍を引て
都の内に入て玉ぐ名臣を悉く言ひ伏せ。ひとりうらびの外に出すべし。董卓
是に従ひ。乃ち李儒に表を造らせ。飛脚を馳て鄴に送らしむ。
何進是を見て用きず其文に曰

臣伏惟天下所以有逆不止者皆由黄門侍
張讓等侮慢天常操擅王命父子兄弟
及郡一書出門便護千金京畿諸郡數百萬
膏腴美田皆屬讓等至使怨怨気上兼妖賊蜂

起臣前奉詔討於扶羅將士饑乏不肯復戰皆言欲詣京師先誅閹豎以除民害從臺閣乞求資直臣隨撫慰以至新安臣聞揚州上洛不如滅火去薪潰癰蚤煽勝於養患成禍及溺呼船臨之無及昔趙鞅興晉陽之兵以逐君側之惡臣輒鳴鐘鼓入洛陽誅讒佞則社稷幸甚天下幸甚

何進表を披見して群臣に示しければ侍御史鄭泰が曰董卓は虎狼なり。若今都の内に入べば必ず人を食ふべし。何進が曰く。汝少も疑ふ勿れ。盧植進出て曰吾すく董卓が心を知り。面は善を現して。内は狼なり。常に不仁の心挾さむ。若禁廷に引入べば必ず大なる禍を招ん。早く人を遣して本国に回しめ。禍逆の患を免れ玉へ。何進叱て曰汝が志ろき老耳なり。柱て君の禄を食。妄りに古を軽て人の心を惑さるものと。鄭泰盧植其に従ざるを見て大に哭き。ともに必ず天下の乱とぞ。ともに此所に居て禍を彼らんより。身の難を逃るて岡居せんとて。二人友を辞て去ければ。荀攸を始めて同く官を辞る者六十人に及ぶ。何進ふ。もはや暁らぬ。人を出して董卓を迎へければ。董卓は澠池に兵を屯して未都の内へ入らず。去程に十常侍が何共なく。明日の勢の上る由を聞て。いかゞせんと相議をして。張讓が曰こゝ何進が計に。我おを討んと為なり。我も早く手を下ぞんばかりの。族を滅さんとて。密に屈強の兵五千人をぞ出して長樂宮



の嘉德門より伏拜皆何太后より見へ哀んでやるべし今大將軍勅令と号し諸国の勢を呼上セ臣ホが三族と滅さんとしたふ願ハ太后憐と垂て救玉へとて頭を以て地を叩き声を放て哭きけるに何太后の曰汝ホ自ら大將軍の府へ行て直に此るを哭き候へ張讓が曰臣ホ自ら行ば益く微塵なるべし願くハ太后此所へ大將軍を召しこと臣ホが命を乞て助け玉へ若此るを叶ふまきといふ力なく皆ふの所へ首を刎て死せん何太后即ち詔を下て何進を宮中へ召し此るとべ何進急き行んとするを主簿陳琳諫て曰此詔ハうたがひ十常侍が計ならん決して輕くしく行玉ふなかれ何進が曰太后詔して我を呼玉ふ如何ぞ行ざらん袁紹が曰今の用意已に具りて勢ひ早張れしく外に知さり將軍今宮中へと何

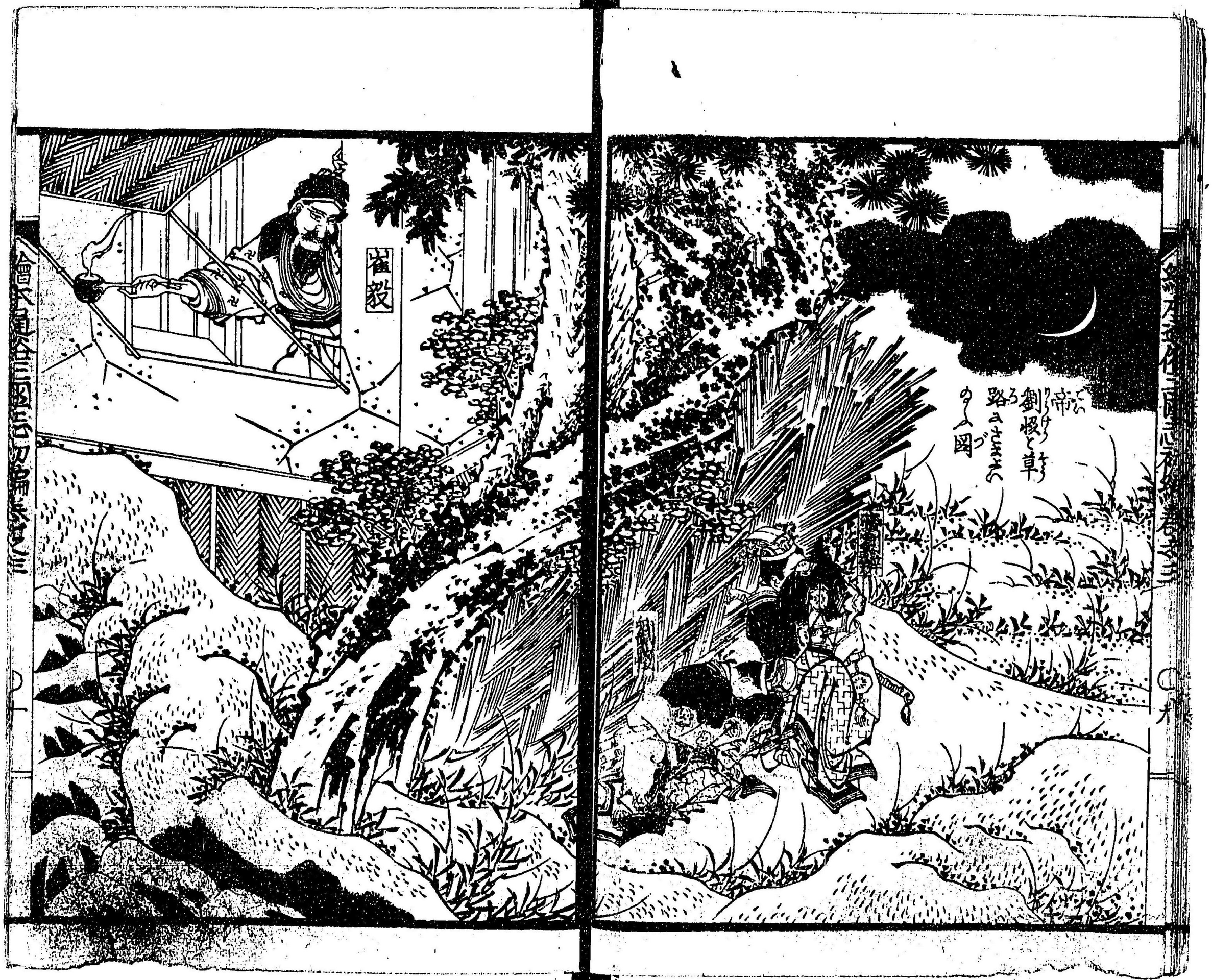
ずを義せんと思ひ玉ふぞ早く心を決して事を起し玉ふを延引ばば害わらん何進が曰くとでも我掌の内にあり何の害が是あん曹操が曰く是ほどまで用意して外にうくきうるとべ先十常侍の奴原を宮中より引出て其後に行玉へ何進わざ笑て曰ふを小児の見るより我天下の兵權を執さう我にちろ付者ならん袁紹が曰く將軍うく行んと思召ば我ホ皆兵を引て相從ん曹操も来り玉るとて二人きびく甲て精兵五百余人を弟の袁術に領せしめ青瑣門外に陣をとらせて袁紹と曹操と百余人を従へ何進を守護して内裡へ附に長樂宮より黄門侍郎が出きたり太后深宮の奥に御座ありて將軍と密に一人へを義せんと宜ふなく一人へ玉へと云ければ何進従ふ若共

門の外より罵り立て一人昂然として傍らに立つ人あるきが如く進んで嘉德殿の門よりへければ十常侍みな出迎て四方より打ちかこみ張讓声を励して曰く董太后いかなる罪ありて汝是を殺しまゐる国母の喪葬を虚病と出ざるハ何也へ汝元来屠沽の家より出て我ホがをこめり因ちそ。うゆうより富貴を極まる。今其恩をわすれて害せんとするハいかに理ぞ。我ホをそそる濁れりといかるぞ。清き者ハ何よあると責けれを。何進答ふべき言葉なく路を求て出んとすれ宮門益く閉て走るをきゆうゆう張讓声を揚て出よくと呼ばりければ門の陰より五十余人の士卒手おとよ刀をぬいて走り出。何進を引張てすくるぞ砍なりける。張讓即ち太尉樊陵を大将軍として何進が職を代しめ宮門を益く開うせければ袁紹曹操あまりより待うね。太将軍早く回らせ玉へと呼ばる所より黄門官壁の上より何進が首をなげ出。何進が謀反あらハまとて詔を来て誅しまゐれり其余ハ益く赦玉へと呼ばる袁紹是を聞て大に怒り内変なるとて大将軍を殺しまゐるぞ。守や若共悪黨を逃もうと罵りければ何進が大将の呉匡といふ者青瑣門より火をうけなり。是を見て袁術が五百の勢益く宮中より乱入て老少男女を分ず當を幸に切廻る袁術曹操二人剣を抜て深宮よへければ樊陵許相内より走り出狼藉すると呼ばる所を袁術飛うりて砍り殺ス。趙忠程曠夏惲郭勝四人いきびしく追まとて翠花楼の上より走りけるを袁術遥うけて火を放ちければ四人ともへ焦て楼の上より飛けるを一人きを殺せり去程より火焔天よはびこりて武士ども宮中に

攻入ければ張讓段珪曹節侯覽若や助るとて何太后其外劉辯
劉協を曽るをり内省の宦人を引ぢき後の路より北宮よ走る此
時尚書盧植官を棄て隠遁せんとて未去ざりしを居りしが宮中
の騒動を聞くや鎧取て投うけ戈を提げ閣下より望べ段珪自ら
何太后を引て出る盧植声をあげ逆賊段珪なれ死るゆを
知べ太后を引ていぎくへ行ぞと言をうければ段珪前よ伏勢
ありと思引返して走ける時何太后窓の内より跳り出玉ふ盧
植急よ馳きたり何太后をとらひけるべ段珪是を奪よ及ばず
跡をも見ずして逃うるを吳匡あまりにも腹を立て直ぐよ内
庭まで攻入けるが何進が弟何苗が劍をぬいて出るを見をけ此
何苗い十常侍が賂いを受て骨肉の兄を殺したる曲者ぞ逃

とる首を取て主の讐を報ぜよと罵り刀を奉して追うけ
れば兵二三十人我先よと馳来り爭て斬て微塵よる
を袁紹四方の門をとぢて内者を見ぞ大小を論ぜず宮
さむ此よ因て暫時よ宮中死る者二三万人髭なき人内官
なりとて誤つて斬るけり曹操兵を知して内裡の兵を滅さ
せ袁紹と何太后を請じて焼のこりたる宮中よ入る勢を四方
よ分て天子を尋ぬ此時張讓段珪二人帝并びに陳留王
を劫うして火の内烟の中をもいとぬ後宰門より出て北邙山へ
と志ざして落けるが日をでる暮て初の間に二十四人ありける者共
盈く逃失て夜の二更の比いづく共なく喊の声大よひき河岸
掾吏閔貢とふ者大勢よて追うけ是をにおいざ近くやて張讓

ぞくへ逃るぞと呼わりたれば張讓へるの急なるを見て頭を以て地を叩き帝より向てよけるへ臣己よのごるゝき路なし。陛下能龍体を保ち玉るとて。河中にとびへとびたれば段珪なゞ一人路をたづねて走りけり帝へ陳留王と追手の虚実も知ずとければ河のわとりゝる草の中へ伏うくるとさせ玉ひ兄弟声を呑で泣咽び玉ふ。時は中平六年八月二十四日の夜なれば已に四更の比より至露冷うゝ御衣を湿し殊更今朝より飢疲れ玉ひければ二人手をとりて草莽の中へ伏まろび陳留王宣ひけるへ此所より くてあらんも然るべくべ只路を求て命を全とり候へとて。帝の御衣を我衣と結び合せ草を分て出ふの目さと共知ぬ暗き夜に荆棘路へ満さりしへ御足も傷へ損じてをむべきゆうゝゝしへ天を作てなきうゝみ給ふの有まふしぎや数万の蛍いづくともなく飛ありまる光をはなちて帝の御前へきなりける陳留王大へ喜び是天の助なりとて指南へ出いんとて。蛍に道をひきて。やうくに歩出玉ひ。いまこそ人の通山路と覚しき有まで出て。二人手をとり。一たび歩んでいまろびたをれ五更の比へいさりて。一すも動き玉ぬ。岡の前なる草の上へたゞ伏て哭き玉ふ此有に世の濁りを厭て年久く閑居せる者あり。夜深くこのうちへべよく寝入て居さりしが俄へ紅の日輪二門家の落へ落さりと夢を見て。おどろきて頭へ上り。あまりのふしぎさに戸を開て望て見べ。ふるき草の中より光の光天へあゞる。家主大へあやしみ走り出て見べ。二人倒さ


崔毅

伏くる者あり。家主問ひて曰く。汝は何なる少年ぞ。陳留王
答て宣く。是なるは大漢の皇帝なり。十常侍が乱に逢て夜中に
是まで出奔り。家主大に驚き地に再拜して曰く。臣は先朝に仕へ
る。司徒崔烈が弟の崔毅なり。十常侍が官を賣賢を妬み
兄を世を逃れて此所に住くしとて。帝を扶て茅屋に入奉り
跪ずいと酒食をすゝむ。帝御心を安じ給へ。陳留王と崔毅が家
に隱てぞ住ける。河南の掾吏閔貢は段珪が既を追て逢
に生取帝をいぢくへと隱しなりと問に段珪答て急なりしめへ
道の傍に捨なりと云けれは閔貢はくとて其首を斬て馬の鞍つ
け。終夜ぐら帝を乗て崔毅が家に来り。餘りに飢たるとて一飯
を賜へとこけれは内より崔毅出向ひ鞍に拴りたる首を見て仰

細を問に閔貢しかくと語る。崔毅喜ひたゝび。引て帝に見へさせけ
れは君臣声をあげて大に哭く。閔貢が曰く。天下一日も君なくんば有
がたしと。早く都に回り給へと。崔毅が飼ふる一匹の痩馬を備
て乗なり。我馬に陳留王を乗しめ徒歩にて家とはなれて三里ばかり
出けれは向より司徒王允太尉楊彪左軍校尉淳于瓊右軍校尉趙萌
後軍校尉鮑信中軍校尉袁紹等ね百騎を引て馳きたり。帝を見
へて大に哭き。先段珪が首と都に上せ市にさらさせ還幸の儀式
と取はくらふ。是より先に洛陽の小児の謡に謂る。侯非侯王非王
千乗万騎走北邙と謡しに今日の事に思い合さるなり。かくて御輦を
急ぎて二三里もとぎる所に向より旌旗天を蓋い馬烟りを
あふりて。甲なる軍勢野に漫り山に満て出きたりけれは百官色を

失ひ比皆茫然として怕るるく。袁紹馬を出して何者ぞと遮
幸の路を塞くぞと問ふ。太く遅まき大将錦の旗の陰より天子ハ何
くゝ居るぞと呼ばれば帝を始めなり。御供の百官益く膳を令
て再び言を出して者ぞ。陳留王馬を出して来者ハ何ものぞ。そ
名を聞んと問へば。彼大将者曰我ハ西凉の刺史董卓なり。陳留王
宣ひけるハ汝ハ来る帝を守護なんが為又奪ひなんが為
ぞ。董卓が曰く。我ハ天子を補佐なん為ぞ。陳留王の宣く。汝捕な
らんとすらば還幸ハ恐り遇てぞ。早く馬より下ざる。董卓ハ
て驚き。馬より飛んで下地乃上ハ拜伏しければ陳留王ちらくよりして。
好言を以て慰労しぬ。董卓ハ肉此人の才覚よりたねるあら
ぬと驚き。共ハ御駕を守護して宮中へなる。帝ハ何太后ハ見
へて共ハ帳涙ハ咽びぬ。傳国の玉璽を失ひぬとて大ハ哭きぬる
しぬる。此玉璽ハ秦の始皇より以来相傳て代々の帝国を保ち
ぬる印なるに。此付ハ失なハ漢乃世のおとろへなる故ハやとて。
聞人眉をひそめける

呂布刺殺丁建陽

董卓已に洛陽ハ入城外ハ陣を取て毎日きびしく甲冑を。数千
騎の兵を引て。城内ハ街市の辺ハ横行しければ人民惶ぐと
して驚くぶとい者ぞ。此付始て詔書を以て東郡の太守橋瑁
河内の太守王匡并州の刺史丁原も兵を引て上りぬるぞ。何進ハ已ハ
亡なるを聞て。橋瑁王匡ハ徒ハ回りける。董卓是より志ざしを
常ハ内裏ハ出入して。憚ぬる所なく挙動ければ後軍校尉勉信安

らぬなんと思ひ。密かに袁紹に私語いま董卓大軍を引く都の内は縱横をほしいまゝに野心を挾さむかと云りけるに袁紹ひそかに朝廷近ぢかに少し静まりなんぬ。速やかに兵を動かしがたく勉信に司徒王允に告げ王允も從がはざりしかば。かくては天下の乱となん。不如身の難を免れんとて勉信は手勢ばかりを引具し。泰山へ遁れ去りぬ。是より董卓ますます驕ひ日に益盛んなり。されば初め何苗に從ひし軍勢も益く其手に屬し董卓密に李儒に問く。我今當今の天子を廢して陳留王を位に即んと思ふ如何に。李儒答て曰く。いま朝廷主なきの時に乘て早くふ計りなく遲き時は変あらんぬ。明日温明園の内に酒宴を設け百官をあつめて此事を言出し從はざる者を斬殺し指鹿の計今日にあり。

董卓大に喜び次の日温明園に酒宴を設く百官を請ぜられけ。誰か敢從ざらん其威を怕れて尺に未る董卓人を生て百官の集り来るを窺はせ其後徐ろに馬を打て轅門の前にやらりと飛ぶり劍を帶て内に入。一おもて鼎を奏し酒をもむ。已に半酣なるに董卓百官に向て曰。今一人の天子を後せん。諸君すくやかに夫天子方民の主なり。天下を治むるに威儀なき時は宗廟社稷を保つ。況んや先帝の密詔あり。劉辨は輕浮にして君たるに足ず。次の子劉協は聰明にして學を好む漢の基業を継ぐべしと宜へり。我當今の天子を廢して旧の如く弘農王に陳留王劉協を帝位に即きらんと思ふ。百官是を聞て大に驚き黙然として居たるに忽ち一人前に卓九を推のけ昂然として

曰く。豈用く。汝何者ぞ。と叱れば。百官も丁原をそしりて言を吐出せず。朝廷よりの使者と思う。當今の天子は漢の霊帝の嫡子。仁徳は負きなれば。安んぞ乱りに廃立をなん。我よく汝が野心を知。誰か従がふ者あらんや。と。そらんじ味いりければ。諸人汗を流して。是を見るに。并州の刺史丁原字は建陽なり。董卓怒て曰。朝廷の大臣ども。なぞ未言を出さば。汝ふ者なれば。安りに舌を動うぞと。剣を抜て斬んと。目清秀。五原郡の呂布字は奉先。と。天下に双なき弓馬の達者。と。幼なきより丁原と父子の約を結ぶ。手は方天戟を提さげ。怒る眼星のごとくにして立たりければ。李儒是を怕し。急に董卓を推て。宮中に国家の大事は酒後に論ずべし。明日朝廷

に公論しなんと。云ければ。百官も丁原をそしりて。董卓又百官に向て。我云る公論にあらざれば。思ひ思ひに。と。問ければ。盧植席を起て曰。足下の論相違せり。昔殷の太甲王位に登て。僅に二十七日が間に三千余條の罪を犯し。ひしひしと霍光是を大廟に告て廃せり。當今の天子御年幼なしと。雖共聰明仁智にして。童髪も過ず。足下は元外国の刺史にして。国政に関ずべきや。伊尹霍光が才なし。安んぞ廃立の事を論ずべきや。古人も云り。有伊尹之志則可。無伊尹之志則篡也。と。足下強く此事を強しなば。時は天下を奪んとの企てに似たり。董卓大に怒り。剣を抜て斬んとしける。侍中蔡邕議郎彭伯二人推て曰。盧植は海内

の大儒なり。人ものを知ざる者なり。今若是をころすべし。天下ふるへ震い怖れん。董卓ものに因て其命を扶け。友を剥て追出しければ盧植は是より世を遁れ上谷へ入て閑居せり。司徒王允ものを見て長居せんとあしうなんと思ひ給まへ。進出て曰く。廃立の大事はうゆうの時は論ぜざるこれなり。別の日と定めて議せんとて。百官盃く退散しければ董卓それを追へ一人も残さず斬て捨んとて剣を抜て轅門の外へ出るに呂布馬に打乗て戟を提げ門外より徃来と董卓其気色を見て李儒に向て曰く。彼いかなる人ぞ李儒が曰く。是丁原が父子の約をなせる五原の呂布といふ者なりとその勇天下に双ぶものなり。董卓いよいよ怕き園を廻りをさけんべ。百友是に因て無ものなるを知り次の日丁原兵を引て董卓が

陣に推寄ければ董卓大に怒り自ら出て望を見れば呂布金の盔を戴き百花戦袍を被て唐猊の鎧に獅蛮の宝帯をかけ。手に方天戟を抱て馬を躍らせ徃来をする行装あたりも天神のごとくなり。董卓の内怕を驚く。時に丁原馬を出し大音あげて呼ばる。漢の天下不幸にして内友権を専にし万民を塗炭の苦しををうく。汝是涼州の刺史。国に対して一すの功なし。安んぞ妄に廃立の議をなす。是まさに簒逆の賊なりと呼はりければ董卓怒き言葉を呂布が討てかゝるを見て陣中へ逃へるを丁原急に追ひ。大に破て三十里引退く。董卓諸の大将を招て曰呂布が勇猛なるを見て。敵をなるのみならず。ふまんと思へ。若此者を味方とするべ我なんぞ天下を憂ざらんとなげきて人

をゝみ出て曰く。某がごとき呂布と同郷の友なり。其心をよく知り。量
りて計るに。利を貪りて義をわすれる。某もいく利害を説べし。必
味方ふまるべし。諸人ともに兄弟たれば。虎賁中郎将李粛なる董
卓よろこんで問て曰。汝いかゝして呂布を降らしめん。李粛が曰く
君の秘蔵なる赤兎馬。ならびに金銀を与へ給へ。其心を
むすんで味方となさん。董卓ときこん。其心を
思ひぐるんぞ。一匹の馬を惜まんと云ば。董卓げにもとそやゞて
彼馬を引せ。黄金千両。明珠玉帯を渡しければ。李粛ときこゝを
従者二人を引そしれ。夜中に呂布が陣よりきたれば。番の者どもなに
者ぞと問。李粛が曰。我は呂将軍の旧き友なり。早報せよといい
ければ。急ぎ此すを報ぶ。呂布よびいれ。對面しければ李粛が

禮を施して曰。賢弟別てより恙なきや。呂布怪しとなすに。
御辺いかなる人ぞ。李粛が曰。同郷の友なるを何とて忘るゝ。某
は李粛なり。呂布おどろいて手を拍。問てやけば。御辺今いづくに居
るぞ。李粛が曰。我漢朝に仕へ虎賁中郎将の職を受。今御
辺社稷を扶るのこゝろ。あるを聞て喜ぶなり。名馬あり一日に千
里を走る。水を渡り山を超へるなり。平地を行がごとし。名けて赤兎
と称す。是を御辺に贈て虎威を助けん為に来りとて引いて
ければ。呂布是を見るに其馬全身火のごとくして赤頭より尾まで長さ
一丈。蹄より鬣まで高さ八尺。嘶き声は空に騰り海内の状あるべし
とこゝろ。呂布大に喜び。名馬を賜る。某なるを以て報恩
と云ければ。李粛が曰。某義の為に来る。豈報恩をのぞまん

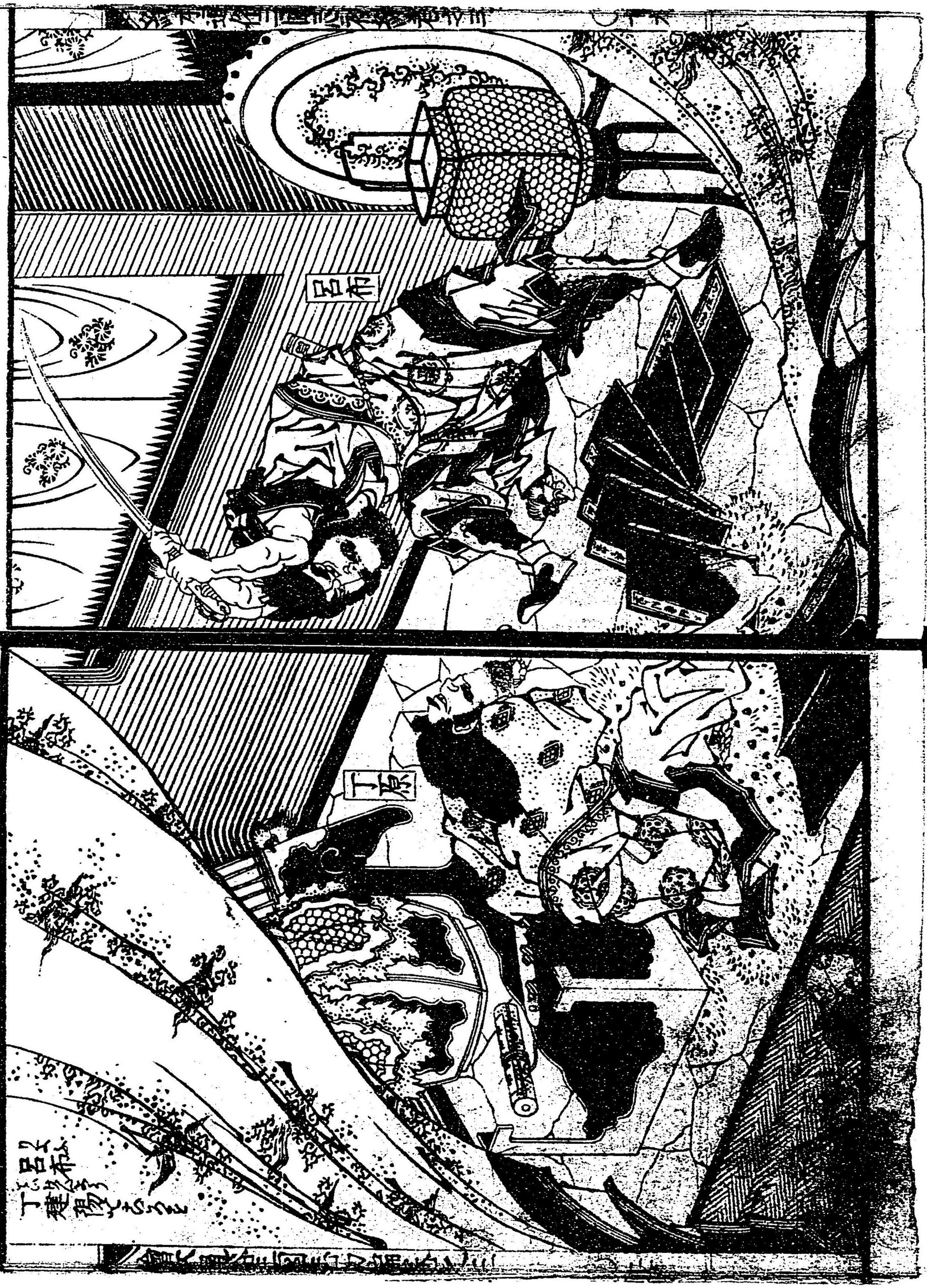
や呂布酒宴を設けて持ちてしれば半酣に至て李肅がいふ
令御辺となまくお逢御辺の父は此馬をよく知るより若し見る
ぬ。うるさくしく奪ひぬるぞ。呂布笑て曰く。御辺は酒に酔ぬる
李肅が曰く其更に酔ぬ。呂布が曰く。某が父は世を辞してもぞに
久し。何ぞ此馬を足るぬるあらん李肅大に笑て曰某が下に丁
原あり呂布が曰く吾久しく丁原が虜にありて今更出がき
やつひつぐ。李肅が曰く。御辺は擎天架海の才あり四海に名を知
ざらん功名富貴嚢を探りて物をとるもやすし。何ぞ出
ぬるをやすしといぬるぞ。豈いつまで人のしたに居て區々として
をぶし玉いんや呂布が曰ぬる大に其能を展んと思へども恨らくは
拙ぬべき君なし。李肅が曰く良禽は木を相んで栖賢臣は主を

擇んで佐くとあそ承ぬる日月は遷りやすし空しく年老果ると
きは後悔ともも益なるべし。呂布が曰御辺いま朝廷の内にて誰を英
雄と思いぬるぞ李肅が曰吾あまねく百官を見るに董卓に及ぶぬ。
董卓は賢を敬ひ士にあり寛仁にして徳あつく賞罰極めて明な
ぬ。ぬるは大業をなぬるぬ。呂布が曰く。我ぬる董卓に仕へんぬを
願へども其縁なきを恨むるぬる。李肅きくもあるぬ金珠玉帯を
とり出けるぬ呂布驚て曰是いぬる仔細ぞ。李肅あたりの人を退
けて曰是は董卓久し御辺の徳を慕て某を使として此禮物を
送りぬるぬるぞ。きの赤兎も皆董卓の賜ぬるぬる。呂布が曰く董刺
史のおとく吾を愛しぬるを以て徳に報ぜん。李肅が曰く
我ぬるも用ひく虎賁中郎将としぬる。御辺もし仕ぬる富貴

心の随に呂布曰何ぞん是を報ぜざるべき功なり。李肅が曰く掌を内へ
を内へあり。御辺なるとて是を殺ざる。呂布しばらく思案して
るへ此所あらじ。我中軍へ入て丁原が首を取行て董卓へ献
るべし。李肅が曰恐くは御辺あらじ。呂布刀を提さげ。ひらり中軍
へ地へけ出へ此ときに丁原燈を点けて書を見て居けるが驚て問曰
我子なるやがあって夜中へ来る呂布が曰く吾は當世の大丈夫安
んぞ汝が子とならん。丁原あとに起て。なるやふ俄に心の変じた
るぞと。いふも果ぬへ走りうって其首を一刀にうち落し。大音あげて
ひろへ丁原不仁なるを吾ぞ斬殺せり。志ある者は吾に従が
え。志なき者は早く回れと呼りければ落去者大まに及ぶ。李
肅大によろこび先へ入て董卓へ報じ呂布へ董卓酒宴を設け。
自ら出て呂布をむかへ馬より下りてひけるは今呂布先を以て。早
苗の雨を凌ぎおとし。呂布再拜して曰く某は暗きを棄て
明るきに事へ願くは父と仕へ力をつくさん。董卓喜びなえぞ内
へ入酒宴をなす。李肅へ重く恩賞をあたえ呂布へ金の甲
錦の袍を賜ひける。

廃漢帝董卓弄權

呂布をでへ董卓へ降りしへ董卓其勢を合せて威風いよ〳〵大な
り。即ち自ら前将軍と領して弟董旻を左将軍鄠侯へ封じ。
呂布を騎都尉中郎将都亭侯へ封ず。時へ李儒ちうへ當今
を廃して陳留王を立へきをすめしへ董卓是へ従い省中へ
宴を設へて百官を招へ手へ剣を執て申けるは大なる者天



地。次ハ君臣ノ治ヲ乱ル本ナリ。上礼ヲ失ヒ給ハヽ天ノ背ク。今上皇帝闇弱ノ主ニ。天子ヲ立ル足ベシ。我今伊尹霍光ガ例ニ倣ヒ帝ヲ廃シテ弘農王ヲ立テ君ヲセン。汝百官其心いかんと云ケレバ群臣ヲ恐レ怕テ答ル者ナシ。所ニ中軍校尉袁紹ヒトリ出テ曰ク。むゝ太甲不明ナリシヲ伊尹是ヲ放ち昌邑罪ナリシヲ霍光ハ是ヲ廃ス。当今の天子徳ナク罪ナシ。汝いま嫡子ヲ廃シテ庶子ヲ立ントスルハ謀反の心ゆゑ。董卓大ニ怒リ。天下乃大事ヲ汝我ニあり。誰カ吾ニ逆ラン。汝ヲ斬剣ヲきれすぐと思テ。廣言ヲ出シ。とゝ云ハレバ袁紹モ大ニ怒リ剣ヲ抜キ。ハ汝剣ヲ斬ベキ。剣モよくきれしん董卓いよ〳〵腹ヲ立テ。ハヤ大事ヲ及ンとスルカ。蔡邕急ニ止テ曰ク。軽ク事いまだ定ラズ。ゆゑ〳〵殺シ難シ。袁紹ハ此ノ人ハ百官ニ百官ヲ長揖シ。剣ヲ提ゲテ外ニ出。節ヲ東門ニ授け乗馬ニ乗テ冀州ヲ指テ下リケレバ。董卓乃チ太傅袁隗ニ向テ曰ク。汝姪甚だ無礼ナリ。我いま汝ニ對シテ殺サズ廃立ノ事ヲ汝ガ心いかん。袁隗ガ曰ク。まことニ尊命ノごとし。董卓ガ曰ク。百官の心いかん。我命ニ背ク者ハ軍法ヲ以テ事ヲ行ハン。百官ヲ震ヒ怖レテ曰ク。誰カ尊命ニ従ハザランヤ。董卓又侍中周毖校尉伍瓊議郎何顒三人ヲ呼ンデ曰ク。袁紹ハ冀州ヲ指テ逃ヤリ。是謀反の心ヨ。あらバヤ周毖ガ曰ク。廃立の事尋常の人の及ぶ所ニあらず。袁紹大件ヲ聞テ恐怖シテ出走ルなんぞ野心ヲ起シ。とゞまらん。君ヲ逼らバ。やむことを得ずして変ヲ生ぜん。其上彼ハ四代まで三公

る昇りて恩德を四方に布き門下より賢多くに沿ひ若兵を集
て事を図らと附い山東の国て益く従ひ属せん不如さると
敢て一郡の太守に封ず其心を安らかにする。蔡邕曰く其ひ
さきより推とぐめしも此の袁紹の計を好ども決断なく
只ちに一郡に封ずれば諸人の心を安堵せしめる。董卓
此義に従ふべしと。即附よ人と善ヒ袁紹を渤海郡の太守
とす。是より内外の政事。ちまちく董卓が料らひとなりければ
九月朔日帝を嘉德殿に請ぜ文武の百官きたらざる者斬んと
解けぜ。一人も残らず集りあはせる董卓側を按じ乃ち少帝闇
弱にて全く威儀なく。天下乃君とさるふ恐ぜ今郊天の策文有
よく〳〵是を読むべしと。李儒たちまち読ぜ曰

孝霊皇帝不究高宗眉壽之祚早棄臣子自王帝
業紹海内側望而帝天資軽佻威儀不格在喪
慢惰哀如故焉山德既彰溢穢発聞損辱神器
忝污宗廟皇太后教無母儀統政荒乱永樂太
后暴崩衆論或焉三綱之道天地之紀而乃有閔
罪之大者陳留王收聖德偉茂規矩邈然豊下允上
有光冕之德表居喪哀戚言不以邪岐嶷之性有成
周之懿休声美譽天下所聞宜業決業為万世統可
業宗廟廢皇帝為弘農王皇太后逐政應天順人
以慰生靈之望

策文をよく了りければ董卓まぢ天子を御座より引きたり

其璽綬をとき北面して臣下の列に助しめ何太后を引出して素服を剥て平衣とさせられば少帝も何太后も御涙ながしてひれふしまとろ人〻面を掩て悲しけ所に一人大音とあげ賊臣董卓いうなるぞ天を欺むいて聖明の君を廢する不如汝を死を共にせんとて象簡を揮て董卓に打かくる董卓大に怒り武士に命じて引出さしむれば是即ち尚書丁管なり声をあげて君に背く逆賊と呼ばりけるを董卓はるかに首を斬しむるに諸侯陳留王劉協を請じて天子の位に即奉り百官をして万歳を唱ふるに〻礼をなすに何太后と弘農王と永安宮に推込をなり。

乘り仕る者とて唐貴妃と二人の宮女より外いなりしに其外に行者あり。

三族を誡さんと網羅をもて忠ある老臣もいさぎよく悲しむなりし傷ましいなる此君四月に御位に即いて九月に至りて董卓ゆるゆる廢らるさせるべきやうなれども陳留王劉協字は伯和時に御年九歳にして御位に登りるか。是を献帝とかなる。董卓を相国に封じ黄瑣を太尉に上せ揚彪を司徒とし荀爽を司空とし韓馥を冀州の牧に張邈を陳留の太守に張資を南陽の太守とする董卓いよ〻逆威をふるひ賛拝に名をいはず朝に入て趨ず剣を帯履を着ずして殿に上りよろぼい心のまゝに行ひ庚午の年改元して初平と号す此時未安宮に何太后と弘農王とをとゝ居る上朝夕の供御衣服なんどとも乏しくまたらねば日夜憂ひ悶なさせられ御涙さらに乾くまも

ゐて。わが心春風の意をゆるる一双の燕庭の内へとびいりければ弘農王一首の詩を作りて其詩の曰

嬾草緑凝烟　裊々双飛燕
陌上人呼義　遠望碧雲深
何人伏忠義　寫我心中怨

董卓つねに宮女を付て。其体を窺はせけるが此詩を傳へ聞て卓ひとりごとこゝろ〳〵ふく我を怨むる心あり〳〵けり。生て益なし後の害をなさんもがな早く殺さんと。李儒を召て其趣を語りけるに。李儒元來情なき武士なるゆへ自ら兵十余人を引て永安宮へ赴く行此と記何太后ハ弘農王と樓上に居ましゝが宮女さなり李儒が來りていとを云けるに。何ふとあやぶまるゝなり李儒

洛水一條青　是吾旧宮殿

自ら毒の酒を携へきたり。弘農王にもてなしてやりなん春の日融〳〵とあたゝかなるわなりけり。御心を慰めなまとて董卓より此酒を送りてくれとて盃を捧げ〳〵弘農王泣て宣ひけるは此酒はいとも酒なりとはいへども。こゝらの命を縮むる毒なるべし。李儒が曰是は壽酒なりと命を延る藥なりと速に召るべし。何太后の宣く。汝まことに壽酒ならば自ら試て後に献ぜよ。李儒眼を怒らして曰。汝なんぞ早く飲ざる。かの酒を飲ずんば此二色を受よとて。兵に命じて練帛の繩とみどりの刀とを取出しを唐貴妃涙ふむしたんで曰。妾ねがはくは此酒を飲で二人に命をまゐらせん。李儒声をあらげ叱て曰。汝なんぞ彼に命を代らんといへどとて。盃をとりて何太后に汝まづ早く飲と責ければ

何太后胸をうちて宣ひけるは。汝兄何進が計ひに匹夫ありて董卓と都の内へひき入れ。禍を仕出せり。李儒また盃を弘農王よりとり。毒をやうよ飲ばんと。吾よく飲仕ゆとそうたんとあるを。きゝあらげられば弘農王御涙をはらはらと宣ひけるは。上ハ。ちゝ母の命と許して冊よ暇乞をさせよとて。声をあげて哭給ひ歌を造りたまふ其歌ハ曰

天道易ヶ我何安　棄萬乘ヶ退守藩
為臣逼ヶ命不久　勢将ヶ去ヶ空淚潸

唐貴妃も悲しみ給へば。弘農王抱きまゐらせ。泣く〳〵一首の歌を作る

皇天将崩ヶ后土頽　身為帝姫ヶ命不隨
生死異路ヶ従此畢　哀何戚速ヶ心中悲

と歌ひ給ひて。ことを悲しみ問給へば。李儒怒りて。ひけらく董卓今ハ。ことを待ゐ給ふ。汝ハ。你ホ。ゆ。命を惜んで誰が助けと待ぞと責給へば。何太后声を荒げ。国賊董卓天道ある。你を祐け給ふ。ゆゑらど四討をうゝむべ。李儒匹夫ホ。ゆ紂を助けて悪をなす。ちまち滅亡をうるぞと罵り給へば。李儒大に怒り左右の手を挑て何太后と樓のうへより投落し。弘農王ハ。ひ李儒が袖よとりて。きうゝを武士どもを鴆毒と灌ぎて歩倒ーなる。唐貴妃と叫び起とゐると李儒引投へて絞ゐ。ぞとはせるのと。董卓よ走り出て。城外へひき出して。一刀ぬきて。董卓大よろこび。三人の屍と城外へひき出して。一刀ぬきて。ぐませいむくほるをゐろく。毎夜宮中にへと宮女よ姦淫ー

欠

MISSING

自ら龍床の上に宿して禁裡の皇女公主を犯しけるぬ前代未聞の悪逆なり。されば兵を引く掠外に横行しるぶある日陽城に出て二月の祭とぬぐ。多くあつまりて村の貴賤をな社日の祭とぬぐ。多くあつまりて兵をもて知して四方より囲を。一人も残らず斬らして婦女をうばひ。財宝をうばひ殺せる者の首と車に載て懐中にいるり董相国に今日賊徒を討ひしことをいふ沙汰させ其首を市にさらすに婦女財宝を恩賞なりとて人民の哭き日にほして家業を安んぜざりけり越騎校尉伍孚字は德瑜と云ものありいかにして董卓をころさばやと思ひ出仕の衣裳の下に鎧をきて懐に短刀をかくし董卓が朝に出る時走りいりてむどと切へ刀を抜く胸の辺を突んとす。董卓なまりの力まさりの力ちからとのあまりに少も騒ぐ伍孚を抱きとめて刀を呂布走り来りて伍孚を突倒すに引出しければ董卓ゆけば汝去を突とひあり。

なるらば叛逆の子黨あらん汝誰の子孫にてるぬらふ白状せよ伍孚目をいからし牙とうんで曰汝ぞ君にあらず我が臣にあらず。何の逆とかあらん汝国をみだり。位を奪て悪逆天にあらずとあるを死を日あらば恨むべし汝を市にさらし微塵にくだくべと董卓大に怒り呂布に命じて首を斬しめ。されども常に用ゆ出へるるらべきびしく甲なる兵を従へ四方を囲せて横行しけり哀招へ渤海郡にありて。董卓が悪逆乃ちよしをぬく密に人を上せて司徒王允に文を送る其書に曰く

卓賊毒天廃主人不忍言入乱禁宮神亦不祐公文恣其

跋扈如不聴聞豈為報国效職之臣哉紹今集五練馬欲図掃清帝室未敢軽挙公想食禄於漢朝當奉聞図之如有駆使即當奉命書不盡言精

宜照察

王允此書を見るより日夜心を苦しめけるぞ。董卓を討べき計ひとあり。ある日参内して一座の公卿達朝廷の旧臣なる忠義の志ざしある人々ありけるに是おとて願ひとりて座中しめとりて今日某が誕生日にて侯る。今夜は私の宅に駕を枉らるべし酒をもてなさんとひけるに人々ありて参りて其夜後堂に席を設て酒肴とりさらせて燭を多く焼させて侍れば群臣ことごとく参りあつまる酒宴数刻よりて王允俄に

即ち群臣に向ひて曰く祝の為にとて哭ぎあるぞ。王允が曰まはく今日は誕生日なれば常より参り會んと存ずれども人々うつうつとして悼りて今夜は計らずもかくの如くなりぬ。某がいかに如何ともせんやうなし。野心漢の天下を奪ひ董卓が勢ひ憂目を見もありぬ。昔漢の高祖三尺の剣を提さげ白蛇を斬て天下を保ちあひ給ひより子孫あまたにして四百余年。なんぞもらん。今日董卓がこめる奴さし人と云我が命を失ふこと空しくおしを見る忍ひ難し。一座の群臣こぞりて涙をながし。ひとたちまち朝廷の大臣夜は泣き暁きまいり言葉より手とりかくして笑ひ朝廷の大臣夜は泣き暁きまいり言葉うるんで暮は及び涙ぐみ間もなく見へなみだ董卓を頃よりこの計らをやあると呼るこのあり。諸人なるて是を見て驍騎校尉

曹操ハ王允大ニ怒テ曰ク汝ハ漢ノ相国曹参ガ後裔ニシテ四百余年
大恩ヲ被リ国ノタメニ害ヲ除クヲト思ヒ却テ逆賊ヲ助ル
ハ何ゾ。汝ハ今夜ノ計ヲ董卓ニ訴ヘバ共ニ死シ
テ後モ思神トナリテ漢家ヲ守ラン。曹操ガ曰ク某別事ヲ笑ヒ
アラバ。サレモノ大臣達董卓ヲ殺ベキ計ヲトハカリシテ女
童ノゴトク日夜涙ノミニムセビヲ笑フ某不才ニシテ力ヘドモ
ガヤウニ計ラントモクロミテ董卓ガ首ヲキリ都ノ門ニ梟ト万人ノ患
ヲトヾムベシ。王允ヨロコンデヨロシ曹操ハ忠義ノ心アラバ是マコト
ニ天ノ助ルナリ何ゾヤウニ計ラントヲ申ン。曹操ガ曰ク。近ゴロ董卓
ニ宿ラヒ住ルヨシ。隙モアラバ殺サンヤウニ董卓今ハ何ヲ
某ヲ愛シテ大小ノ事盗ク問フ。王司徒ハ昔ヨリ希代ノ力ヲ

ヲ恐レ奉ル願クハ某ニ借ラレヨ。ヤガテ董卓ヲ斬殺ト
ベシ。王允ノ曰ク。ハヒ此計ヲ成就セバ天下ノ大幸ナリトヒヤウ
力ヲ尽シテ曹操ヨロコンデ此刀ハ希代ノ名作ナリ。長サ二尺
ヨリ七寸ヲ嵌メテ飾リヲ施シ。その刑ヲ七星ノ剣ト曹操ニ
見セ伝ヘテ。其夜ノ酒宴ハ休ミヌル

122
74
28

繪本通俗三國志 初編 三

122
74
28